研究雑話(138)

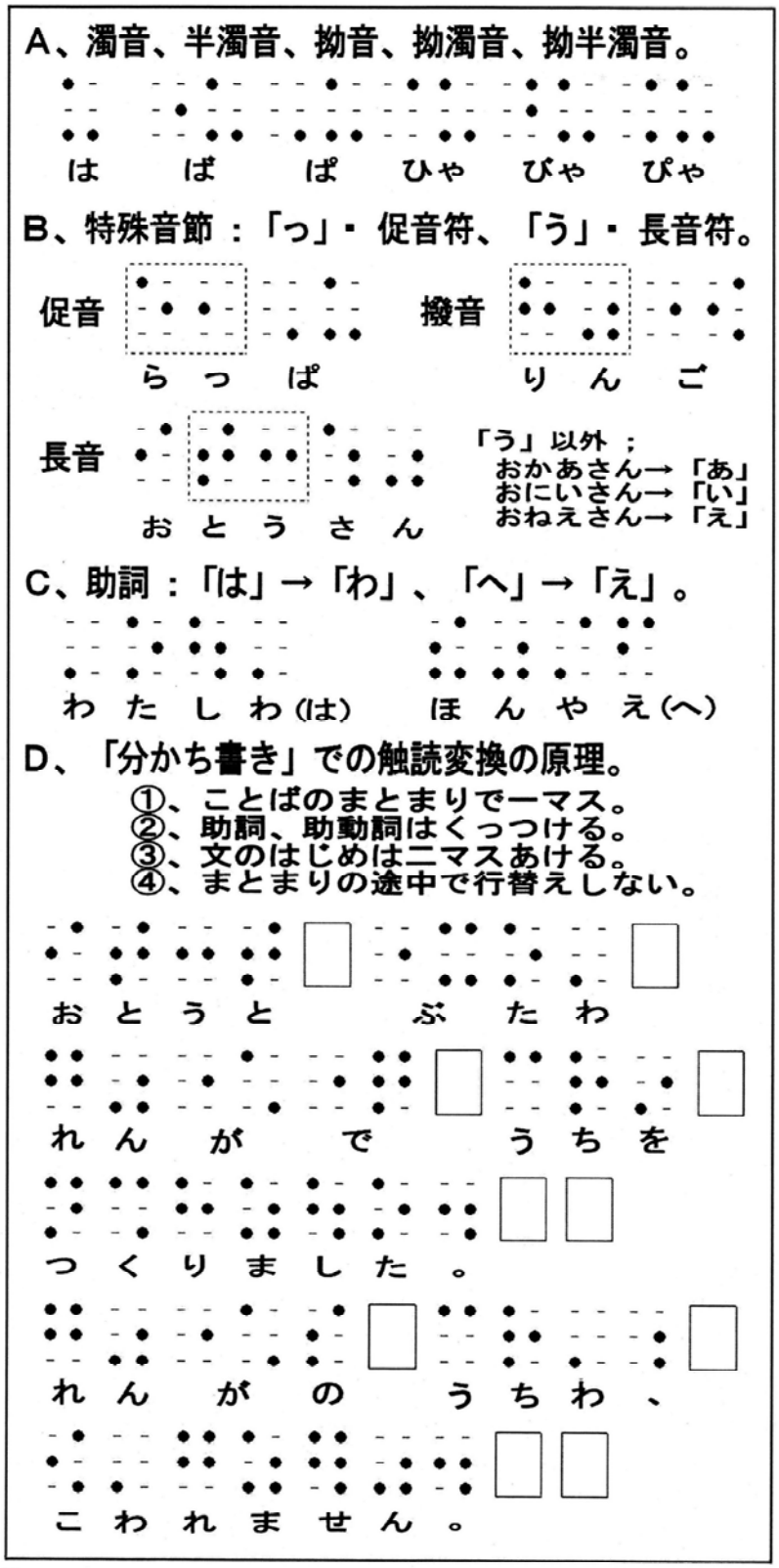
障害児教育・動作学誌上実習(56)

藤井力夫

姿勢反射の発達とリズム運動の習熟(36)

「分かち書き」での文生成、点字・表記法の優位性。

前回は、点字の読み取りを例に、示指先端・指腹部での触知覚の能動性についてお話しました。受動的とされる触知覚が、継時的な能動的探索のもとで実現されているということは、目と手の問題を考えるうえで示唆的です。点字は縦３点横２列の６点ですが、座標としては、まず、母音を規定する「上４点」が基本であったということは重要です。この４点があるから、縦３点の触知で、次の半マスのあり様が予期され、触読されていくのでした。「ことば」としてのまとまりや繋がりが予想できれば、読解はスムーズです。今回は、これを保障する点字表記の原則・「分かち書き」の優位性についてお話したいと思います。



拍節リズムに乗せて、後に付く符号・特殊拍符：点字の表記はすべて仮名で、その触読は拍節理解でもあります。それは、作曲時の仮名置換による音符化と類似しています。撥音（**ん**）や促音（**っ**）等の特殊音節は、「拍節２音」の典型です。**図B**はその例で、後置された符号が拍節形成に貢献していることが了解できます。／**らっ・ぱ**／、／**りん・ご**／、／**お**／**とう・さん**／。符号前置の２マス文字・「**ぱ**」、「**ご**」も、ここでは２音原理に同化した感じです。

「分かち書き」の原理、作動記憶での文生成：点字の表記は聞いた通りが基本です。助詞・「**は**」や「**へ**」は、「**わ**」、「**え**」となります（**図C**）。また、ことばの意味で変換するため「分かち書き」が採用されます。ことばのまとまりで一マス、文のはじまりで二マスが空けられます。／**おとうとぶた**／。墨字では連続ですが、／**おとうと**／で、一マス空けます（**図D**）。自立した意味をもち、その照合が約束されるからです。頭のなかでの照合は、範疇的な意味、統辞的な関係、これら両面からの文生成を容易にします。自立していない語はその前のことばと結びついて区切られます。助詞・／**わ**／は、／**ぶたわ**／と続け、一マス空けます。主格としての意味が強められ、「何を」「どうした」等と、その後の展開が待機されます。助動詞・／**ました**／、／**ません**／も同様で、連続により述部がまとめられ、文意が確認されるとともに、続く二マスは、次の文の展開を想起することに貢献します。

２マス点字、濁点符等での予知：６点では63通りしか作れません。２マス文字が必要となります。濁音、半濁音、拗音等がそれで、各符号が前置されます。**図A**は「**は**」に関係するそれら。符号の前置は、「**ば**」、「**ぱ**」、「**ひゃ**」等への触読を予期させます。